【発行所】
一般財団法人 長 寿 会
小田原市入生田475
TEL.0465－24－0002（代）
発行人／加 藤 伸 一
編 集／夢編集委員会

もくじ

長寿園コミュニティ……2
十六年のあゆみ……4
花によせて……4
いきいき元気会……5
新人職員紹介……5
長寿園の日々……6

長寿園理念

「人生の目的は円満幸福の生活にある」との信念に基づき高齢者がそれぞれ円満で幸福な生活ができるよう所要の協力と支援を行うことによって社会に貢献します。

八十二歳金時初登山
～これも小田原ならでは～

入居者 高津 学

三年前のことである、山友達と金時山に登ることになって下見に出かけた。登山口に車を停めて、あたりを伺っていると、隣に止めた五十歳位の人が「一緒に登りましょう」と話しかけて来た。「準備して来てない、お弁当もない」と言うと、三澤と言うその人は「頂上には有名なお姉さん、いやもう婆さんのお店がある、そこでうどんを食べるのも予定の内」だと言う。すっかり載せられて、これも路ずれだろうと歩み始めた。

公時神社にご挨拶して、杉林の中の急な坂道を登って行くと前日の雨に濡れていて滑る。幾組もの登山者、女性が多い。「こんにちは」「滑りますよ」「気をつけて」と声を掛けあって行く、「今日夜勤だ」と言うこの人は、かなりの強行軍、「ちょっとお先に」と、どんどん追い越して行く。そしてこれが金時手毬石、蹴落とし石、あれが宿り石と物語ってくれた。やがて灌木になって視界が開け、足柄峠からの道と合流する所ではじめての小休止。「ここからは岩石で滑って転落した人がいる、頂上までは ロープを伝って」と気遣ってくれた。

箱根の最高峰一千二百十三mの山頂からは、仙石原、大涌谷などがよく見えたが、御殿場側、期待の富士山は、吹き上げて来る雲で見え隠れ、先着の人が「三十分前まではよく見えたのに」と残念がってくれた。

お目当てのおばさんの店は大賑わい、常連さんがにわか店員になって手伝い始めた。ここには記名簿があって、この記録回数を記した名札が、三千八百回から順に並んでいる、仮に登山年齢を三十年とすれば、年に凡そ百三十回（三日に一回以上）である。この山の何がそんなに魅力的なのか。富士の眺め、人気のおばさんの店、果ては鉞（まさかり）をもっての今様金時になることなどの楽しさがいっぱいだからか。

帰着すると、三澤さんはすぐに車を始動して走り去った。「朝起きて見たらよさそうなのでやってきた」と言う忙しい登山だ。でも「これくらいでないと何千回も登られないな」と納得もした。

「この山になんどでも
呼ぶ神宿る」

金時山 鉞を担いで

長寿園コミュニティ

理事長　加藤伸一

長寿園には「和の会」というほぼすべてのご入居者が参加するご入居者自身よる会があります。ご入居者同士の親睦を深めるのがその目的となっていますが、管理費の改定や契約条項の改定などの時は住民団体のような役割も果たします。歴史は古く、昭和四十年代に「長交会」という名称で発足しました。その後、昭和五十三年に新しい棟ができると名称は「交友会」に変わりました。そして平成十一年に現在の「和の会」に変わります。時代とともに活動内容も変わってまいりました。

先日、「和の会」主催で、「尊厳死について」の特別講演会がありました。役員の方が講師をお招きしての催しです。最近の流行は、「看取り介護」です。いったいどこから急にこんなことがクローズアップされるようになったのでしょうか。最後は誰でもあるのです。長寿園では何十年も前から、希望する人には長寿園での看取りを行っていました。しかし、今回の「尊厳死」の講演は看取りではなく、看取りに至るまでの人生の最後の終わり方についての講演です。私の何十年の経験からもその方が看取りよりも何倍も重要だと思います。看取りはある意味、看取る側の問題です。尊厳死は本人の問題です。人間というものをどうとらえ、死というものをどう考えるかということが、我々の仕事の根本です。また、哲学的な問題でもあります。しかし、世の中は、そういう方向ではなく、介護とか看取りとか技術的なものにばかりに目を向けがちです。

高齢者の幸せとはいったいなんでしょうか。介護は最低限必要なものであり、食事のようなものです。それがなければ生きられません。「人はパンのみにて生きるに非ず」それらが満たされたうえで文化、教養的なものがあって初めて幸福な生活・充実した人生となるのではないでしょうか。

「和の会」は第二弾で「フィリピン災害救援募金」をお仲間同士で始められました。一昔前だと、ご入居者から園で実施すべきだというご提言になりましたが、ご入居者が自ら立ち上がる、私はこれが本来の姿だろうと思います。これは、長寿園が誇れるご入居者の方々です。そして、長寿園の伝統です。

有料老人ホームはサービス産業となり、サービスの売買という形が年々強化されているように思います。ご入居者が生き甲斐をもとめれば生き甲斐を売る、怠惰を求めれば、怠惰のできる状況を供給する、しかし、これでは、ご入居者は決して幸せになれないと思います。リハビリを拒む人にはきらわれてもリハビリを勧める、生き甲斐は買えるものではなくて、自分で見つけるものであり、そのお手伝いをするというのが本来の仕事です。リハビリを嫌わる方に、いやいやでもおこなっていただき、結果として機能が回復すれば感謝される、そういう仕事です。

普通のサービス産業ではお客様は神様であり、お客様のいうとおりにすることが最上かもしれません。しかし、この仕事はだいぶ違うように思います。最近の有料老人ホームの経営会社

和の会主催「尊厳死公演」のようす

は前号でもお話ししましたが、たびたび入れ替わってしまったり、会社が変わらなくても、社長が定期異動でたびたび変わってしまいます。オーナー会社では考えられませんがグループ企業になるそういうことになるのです。各ホームや会社は理念を標榜していますが、トップの哲学と理念が一致してないと真の目的は達成できないのではないでしょうか。そして、ホーム長もしかりです。ご入居者にしてみればそこが家なのにたびたび家風や伝統が変わるようでは落ち着いて生活できないのではないでしょうか。

有料老人ホームは全体が一つの家のようなものです。その点、サービス付高齢者住宅は「隣は何をする人ぞ」の集合体のようなものだから会社が変わっても大きな問題はないように思います。しかし、高齢者は一人暮らしか、夫婦のみの世帯です。コミュニケーションのあるコミュニティーでなければ孤独、孤立しかありません。長寿園は、コミュニティーです。そして、六十年間変わらぬ理念哲学で運営しております。幸い、このたび、私の長男がイギリスでの福祉の勉学を終え、他の会社にしばらくおりましたが、長寿園で働くことになりました。長寿園百周年向けての足掛かりができました。この世に高齢者がいなくなることはありません。六十周年の年にあたり、長寿園の使命を貫くべく新たな出発としたいと思います。

右から
理事長とご入居者
事務局 加藤

川柳「テレビ」

山下　君子

お茶の間に遠慮はしない
コマーシャル

視聴率恐々とするテレビ界

鈴木　恒吉

捕り物にみる鬼平の人情味

名演技鬼平二代見る米寿

竹中　糸子

テレビからおしゃれ心を
くすぐられ

お茶の間でスポーツ観戦若返る

青木　千代

今の世はテレビ無しでは
過ごせない

テレビから時に笑いと
知恵もらう

田中　和子

韓流のドラマ「トンイ」へ
魅了され

はらはらの「トンイ」に合わす
スケジュール

小池　怜子

固唾のむ場面が来ると
コマーシャル

トイレから戻ってもまだ
コマーシャル

田川　富子

ミステリー結末いつも夢の中

寝床からテレビが誘うグルメ旅

十六年の歩み

生活課 課長　松本仲子

十六年前、平成九年四月、私のヘルパーとしての第一歩を長寿園で歩み始めました。経験は全くなく、資格も知識もなく、何もわからない状態からのスタートでした。車椅子の動かし方すらわからず、坂道の上り下り、ベッドへの移乗、入浴の介助、排泄の介助など、全てが一から勉強でした。

当時、ヘルパーは七名でした。介護保険制度もまだ始まっていない時代で、夜間の勤務は、夜勤体制ではなく、宿直としてヘルパーが一名、緊急時の対応のために泊っておりました。ご入居者の中にはヘルパーの事を「寮母さん」と呼ばれる方もおられ、ちょっとなれない呼び名に戸惑ってしまった事もありましたが、今では懐かしい思い出です。

介護保険制度がスタートすると、周りを取り巻く環境も変わり、宿直体制から夜勤体制に変わるなど、長寿園でも様々な変化がありましたが、一番大きく変わったのは現在のC棟ができた事でした。それに伴いヘルパーの人数は急激に増えて行きました。私自身は介護棟での勤務となりました。

長寿園で働き始めてから四年くらい経った頃でした。家族の事情で退職しなくてはならなくなり、せっかく介護棟での仕事にも慣れてきた矢先、退職しました。数か月長寿園から離れましたが、その間に介護福祉士の資格を取得し、ヘルパーとしては一応一人前となる事ができました。その後、長寿園の仕事に復帰し、介護棟で再度、勤務となりましたが、今度は続けられると思ったのに、実家の父（山形）の介護で再び退職。半年後には父は他界。その後他の所で働いておりましたが、離れてみると長寿園でのことが思い出され、また長寿園へ戻ることとなりました。その都度、あたたかく迎えて下さったご入居者の皆様、職員、全ての方に感謝し、支えられて今があるのだと感じます。

十六年前、七名だったヘルパーは、現在五十数名になり長寿園全体も大きくなりました。

ご入居者の皆様と共に、今年六十周年を迎えられることをうれしく思います。そして、これからも一緒に歩んでいければと思っています。

花に寄せて

初春の花「福寿草」

入居者　渡辺千萬子

「花」というと、おおかたの人は「さくら」を思い浮かべるのだろう。或いは女性の容姿、とくに顔をイメージして「花のかんばせ」などという表現もあるが、福寿草はそんな華やかな花ではない。

「福」と「寿」という縁起の良い詞が入っているのでお正月に應しいと思われて愛用されるようになったのであろう。少しグレイがかった黄緑の花も茎も全体で五センチほどかなぁ、小さい地味な花である。年末近くになるとこの小さい一鉢を求めて飾るのが長年の習慣になっていて、それはここへ来てもずうっとつづいている。

ベランダにこの鉢を飾ると、「あぁ又一年経って新しい年になるのだなぁ」という想いが胸の中に湧いてきて、「来年も良い年でありますように」と願う。

福寿草はその地味なおとなしい姿、形に似合わずなかなか強い元気な花で、花が終わって地におろしてやるとちゃんと生き抜いて翌年には芽を出してくれる。ここではみかん山の奥の方にそっと植えてくるのだけれど…。どうしているのかな、見に行くのが楽しみなような少し心配なような想いがする一刻である。

いきいき元気会

生活部門統括
中島 あけみ

現在月一回、各地からのお取り寄せスイーツを食べながらコミュニケーションの場として「ほっとサロン」を行っておりますが、次は皆様と一緒に楽しく身体を動かせる時間を作ろうと考えました。

今はその土地ごとに介護予防に力を入れており、それぞれの特徴をいかした体操や踊り等を行っています。長寿園でもご入居者の皆様になじみがあり何か特徴の出せる物で楽しく身体を動かせないかと考えました。

長寿園には園歌があり、それに合わせた体操を行ったらどうかという声があがりました。結果「長寿園体操」が完成しました。いつまでも「いきいきとお元気でいてほしい」と言う願いから「いきいき元気会」と名付け毎週日曜日に長寿園体操を中心にリズム体操やフォークダンスで楽しく身体を動かしています。今後も「いきいき」としたお顔が見られるよう、新メニューも考えながら皆様と続けてまいります。

新入職員紹介

企画運営担当
加藤 翔

昨年12月に入職いたしました加藤翔と申します。

私は大学卒業後イギリスへ渡り介護について学びました。日本へ戻って来てからは、大学での知識を活かし都内の設計会社に勤めましたが、祖父から父へ引き継ぎ完成した長寿園が60周年というすばらしい節目を迎えるにあたり、長寿園に就職することを決心いたしました。

今までと全く違う仕事に就く不安はありました。しかし、就職してみると幼い頃に両親と一緒に夏祭りに参加させて頂いた時と少しも変わらず、長寿園に入居されている方は私に優しくお声をかけて下さり、暖かい家族の様に接して下さいます。また、その頃から勤務していた職員の方も現在では勤続20年、30年を超えられており、良き先生としていろいろ教えて下さいます。

60年間引き継がれてきた長寿園の理念や伝統を父や、ご入居者の皆様から教えて頂きながら日々精励して参ります。まだ右も左も分からない若輩者ですが、ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

長寿園の日々

11月６日	秋の行楽ショートコース
12日	秋の行楽ロングコース
12月７日	みかん狩り
８日	十字町教会歌のプレゼント
15日	ギター演奏会
22日	コーチャル歌声の部屋
24日	クリスマス会食会
26年1月1日	初顔合わせ
12日	どんど焼き
15日	新年会

初顔合わせ

十字町教会歌のプレゼント

どんど焼き

新年会　雅楽の演奏

ギター演奏会

秋の行楽ロングコース

歌舞伎座

みかん狩り

クリスマス会食会

編集後記

平成二十六年、新たな年を迎えました。九十回大会となる東京箱根駅伝は東洋大学が二年ぶり四回目となる総合優勝を果たしました。

東洋大学は、この箱根駅伝「その一秒を削り出せ」をスローガンに、メンバー一人ひとり、自分が勝負を決めるとの思いで攻めの走りをした結果、つかんだ勝利です。

一秒は、わずか一瞬ですが、積み重ねれば大きな結果をもたらします。平成二十六年四月、長寿園は六十周年を迎えます。私達も小さなことでもコツコツと積み上げて、ご入居者の皆様が長寿園に入って良かったと思っていただけるように努めてまいります。

秋の行楽ショートコース

箱根彫刻の森美術館